

元田敬三が、大阪・釜ヶ崎で人生という余暇を過ごす人々を、
モノクローム・フィルムに永遠に焼き付ける。笠原美智子寄稿。

元田敬三 SHORT HOPE

「元田敬三の写真からは、話し声が聞こえてくる。懐かしい友に遭った時の親しげな視線と、寛いだ被写体の声である。「おー兄ちゃん、久しぶりやないか。一杯飲んでき、そんな声が聞こえてくる」（笠原美智子「元田敬三の《ショートホープ》」より）

元田敬三は、1971年大阪生まれ、神奈川県逗子市在住の写真家です。1995年に大阪ビジュアルアート専門学校へ入学し、在学中の1996年に第33回準太陽賞を受賞。1997年、大阪新聞に路上で出会った人の写真とエッセイを1年間連載したことが制作の源となり、その後も路上を舞台に心動かされる人や光景を撮り続けています。

本作は、2022年から2024年まで「釜ヶ崎」や「あいりん地区」と呼ばれる大阪市西成区北部にある日雇い労働者の街（ドヤ街）を、モノクロームの35mmフィルムでスナップした作品です。

新今宮駅に降り立ち、新世界、天王寺と回遊しながら、誘われるようにして視点は釜ヶ崎へと入り込んでいきます。そこでは、背に龍と虎の刺青が入った女装者、おもちゃのピストルを片手にした長髪の男性、木彫り作品に囲まれた部屋に腰掛ける老人など、奇抜な登場人物たちとの出会いが繰り広げられます。

やがてこの街には、独特のユーモアと、人と人がゆるく繋がる場があることに気付かされます。三角公園の街頭テレビにどこからともなく人が集まる光景や、商店街が子どもたちのキャッチボールの遊び場になったり、道端で将棋やギター演奏が始まったりする風景は、できるだけ他者との摩擦を引き起こさないように振る舞う現代都市とは異なり、余所者を受け入れるおらかなこの街の性質として、心地よく私たちの目に映ります。

約30年ぶりに自身の原点とも言える大阪で撮影を始めた元田は、まるでショートホープのタバコの火が消えるまでの時間のように短い人生の中で、「余暇」の時間を楽しみながら釜ヶ崎で生きる人々を、写真というメディアに永遠に残したいと願いました。残された写真からは、「この街と人が今日もどこかに存在する」という小さな希望のような光が、私たちの心の中に微かに灯るのを感じることができるでしょう。



『SHORT HOPE』

2026年3月5日発行

著者 元田敬三
寄稿 笠原美智子
デザイン 宮添浩司
発行所 ふげん社
サイズ A4変形
仕様 上製本
頁数 176頁
写真点数 150点
定価 6,600円(税込)
ISBN 978-4-908955-49-5

プロフィール：元田敬三 Keizo Motoda

1971年大阪生まれ。1995年大阪ビジュアルアート専門学校入学、在学中の1996年に第33回準太陽賞を受賞。主な出版物に『渚橋からグッドモーニング』（ふげん社、2021）、『轟』（蒼穹舎、2019）、『SUNDAY HARAJUKU』（omoplata by Super Labo、2012）、『青い水』（ワイズ出版、2001）など。現在、神奈川県逗子市在住。大阪芸術大学客員教授、専門学校東京ビジュアルアート・アカデミー非常勤講師を務める。



▶ご注文はツバメ出版流通まで FAX：03-3721-1922 TEL：03-6715-6121
mail：info@tsubamebook.com http://tsubamebook.com

貴店名（番線印）	新刊 ふげん社	https://fugensha.jp https://www.shashin.tokyo/ 返品条件付注文扱い 返品了解 ツバメ出版流通：川人
ご注文数	元田敬三 『SHORT HOPE』	
ご担当： 様	ISBN 978-4-908955-49-5 C0072 定価：6,600円（本体6,000円+税10%）	